中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第二回　日本語文化圏“倭”の登場

前回の復習

前回の授業では、分子人類学の研究成果をもとに、現生人類のルーツと日本人の起源について考えてみた。

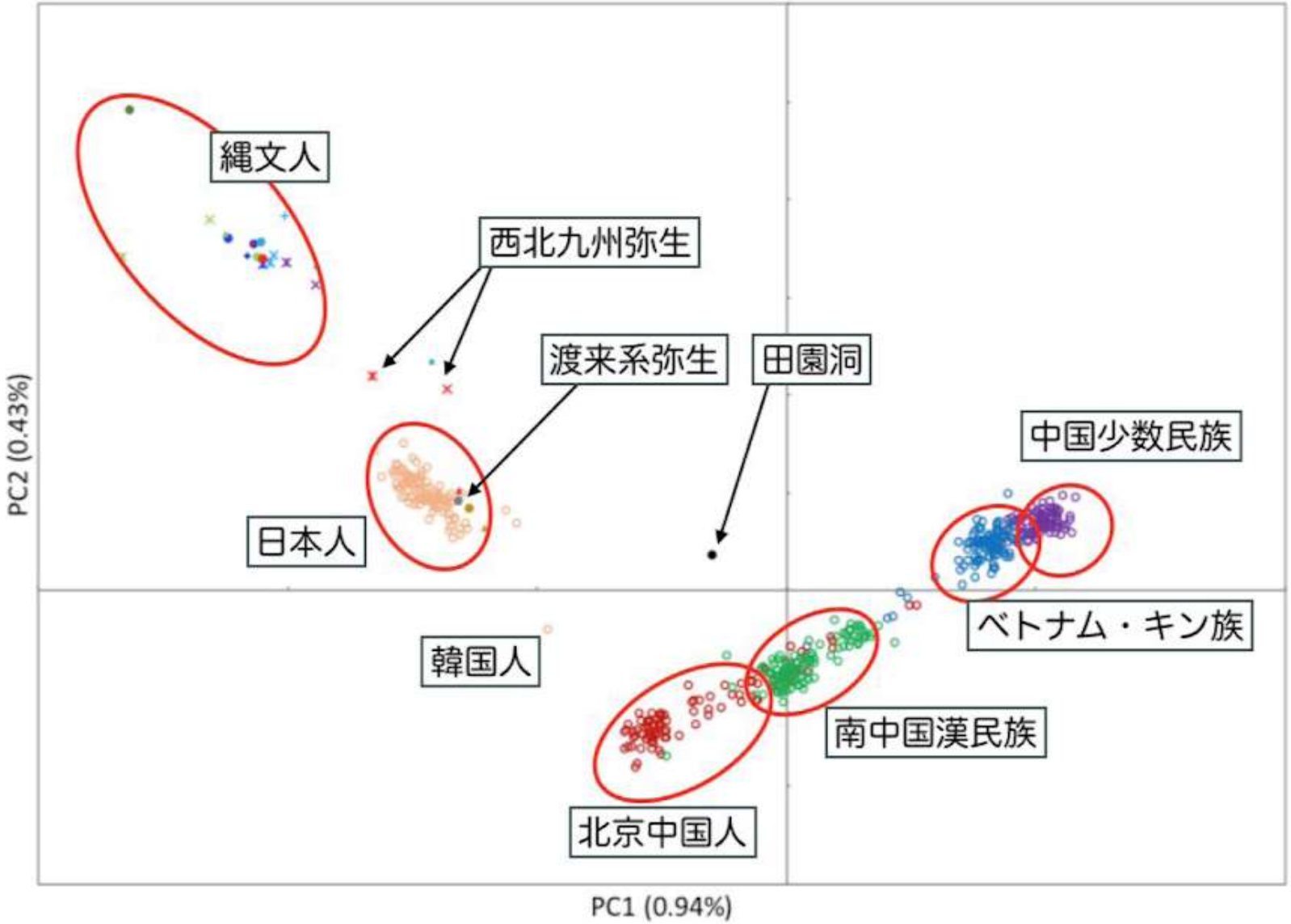
アフリカ単一起源説

現生人類は、二十万年ほど前にアフリカに誕生し、その後、六万年ほど前にアフリカを出て世界各地に拡散した。その過程でそれぞれの地域の環境に適応し、白人、黄色人種などの特徴を持つようになった→「人類はみな兄弟のようなもの」

日本人の遺伝的特徴

遺伝的にみた場合、日本人はアジア各地にルーツをもつ多様な集団である

縄文人・弥生人と現代の日本および東アジア諸民族の遺伝的距離



「全ゲノム解析法を用いた縄文人と渡来系弥生人の関係の解明」
（研究代表者：篠田謙一、独立行政法人国立科学博物館 2018年）

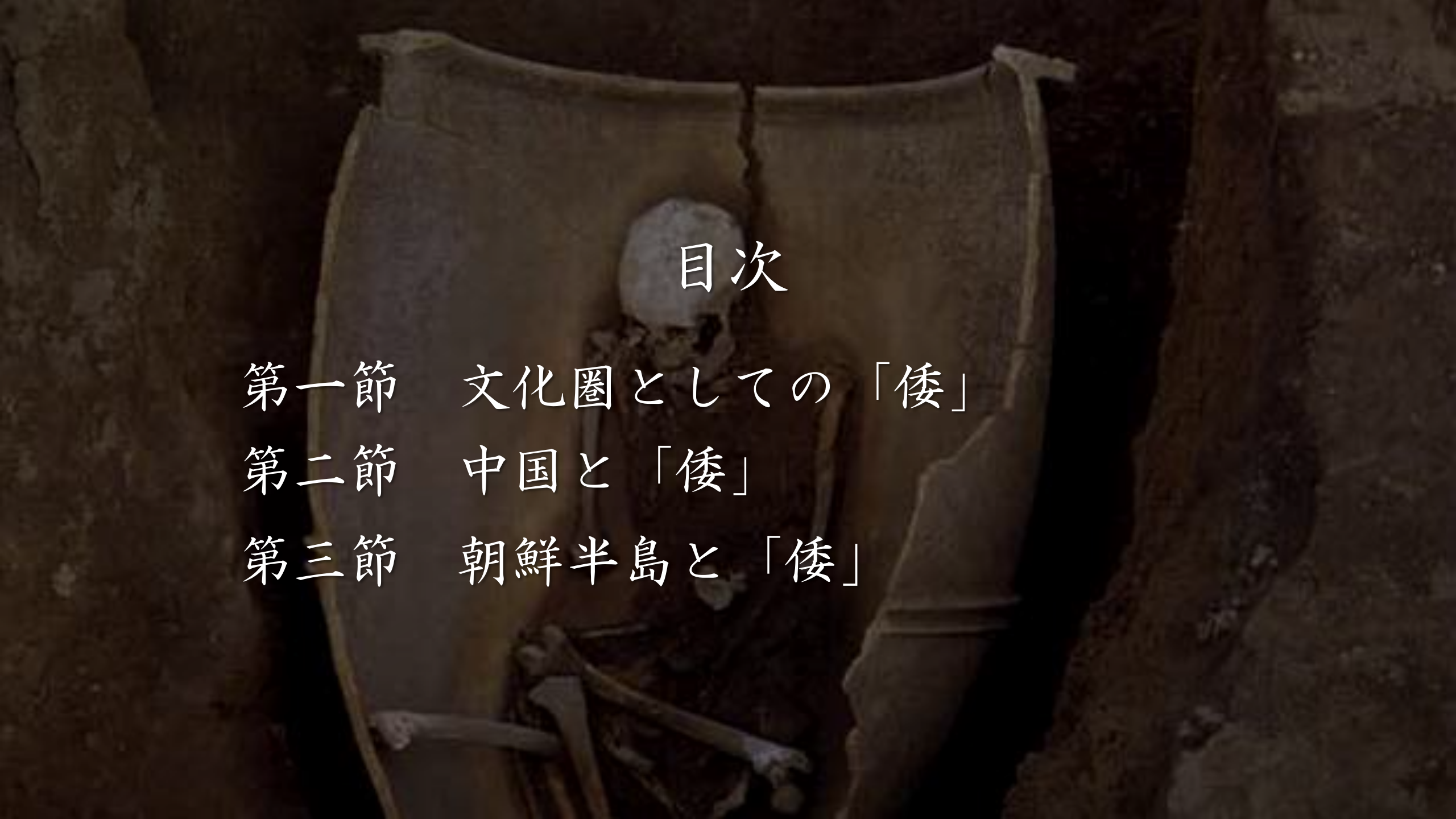
日本語文化圏「倭」の登場

〔解説〕

縄文文化や弥生文化を築いた人々は、遺伝的にはアジア各地にルーツを持つ多様な集団であった。

彼らはやがて日本語を共通言語とする独自の文化圏「倭」を形成し、中国大陸や朝鮮半島との交流を開始する。

吉野ケ里遺跡(佐賀県)



目次

第一節　文化圏としての「倭」
第二節　中国と「倭」
第三節　朝鮮半島と「倭」

第一節　文化圏としての「倭」

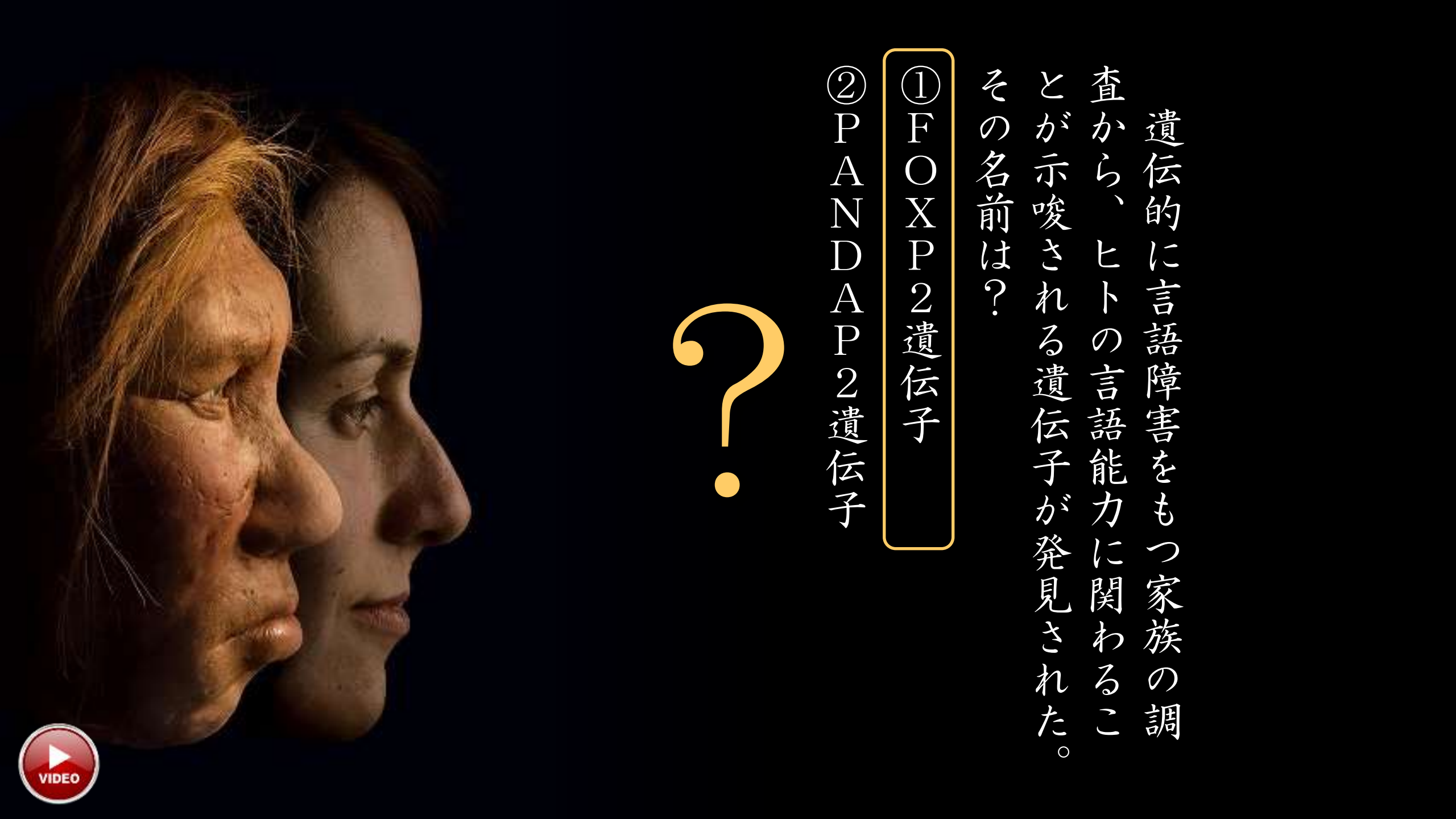
ネアンデルタール人はなぜ絶滅してしまったのでしょうか？

①現生人類に比べて脳が小さく、力も弱かったため

②現生人類より脳は大きかったが、言語能力が弱かったため

？

NHKスペシャル「生命大躍進 第３集 ついに知性が生まれた」


遺伝的に言語障害をもつ家族の調査から、ヒトの言語能力に関わることが示唆される遺伝子が発見された。
その名前は？
①FOXP2遺伝子
②PANDAP2遺伝子
？
VIDEO

NHKスペシャル「生命大躍進 第３集 ついに知性が生まれた」

現生人類とネアンデルタール人

〔解説〕

前回の講義でも紹介したように、スヴァンテ・ペーボらは、二〇〇九年にネアンデルタール人の細胞核ＤＮＡの解読に成功した。これにより、現生人類とネアンデルタール人のＦＯＸＰ２遺伝子の比較が可能になった。

スヴァンテ・ペーボ(Svante Pääbo)

NHKスペシャル「生命大躍進 第３集 ついに知性が生まれた」

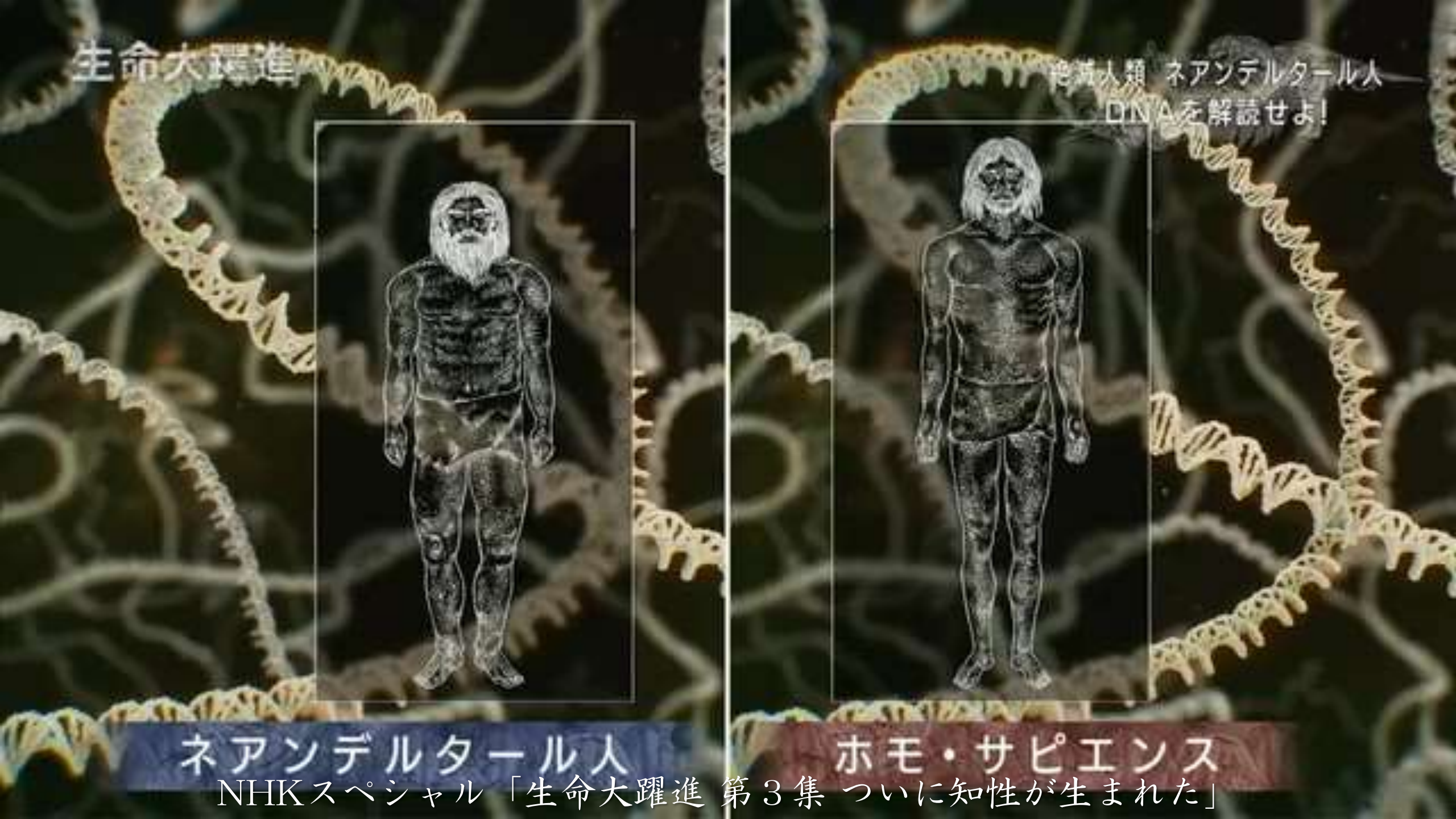
現生人類とネアンデルタール人の
ＦＯＸＰ２遺伝子の配列に違いは
あったのか？

① 違いはあった

② 違いはなかった

↓答えはビデオで

？



NHKスペシャル「生命大躍進 第３集 ついに知性が生まれた」

吉野ケ里遺跡(佐賀県)

日本語文化圏の成立

現生人類は、その優れた言語能力によって高度な文明を築いた。

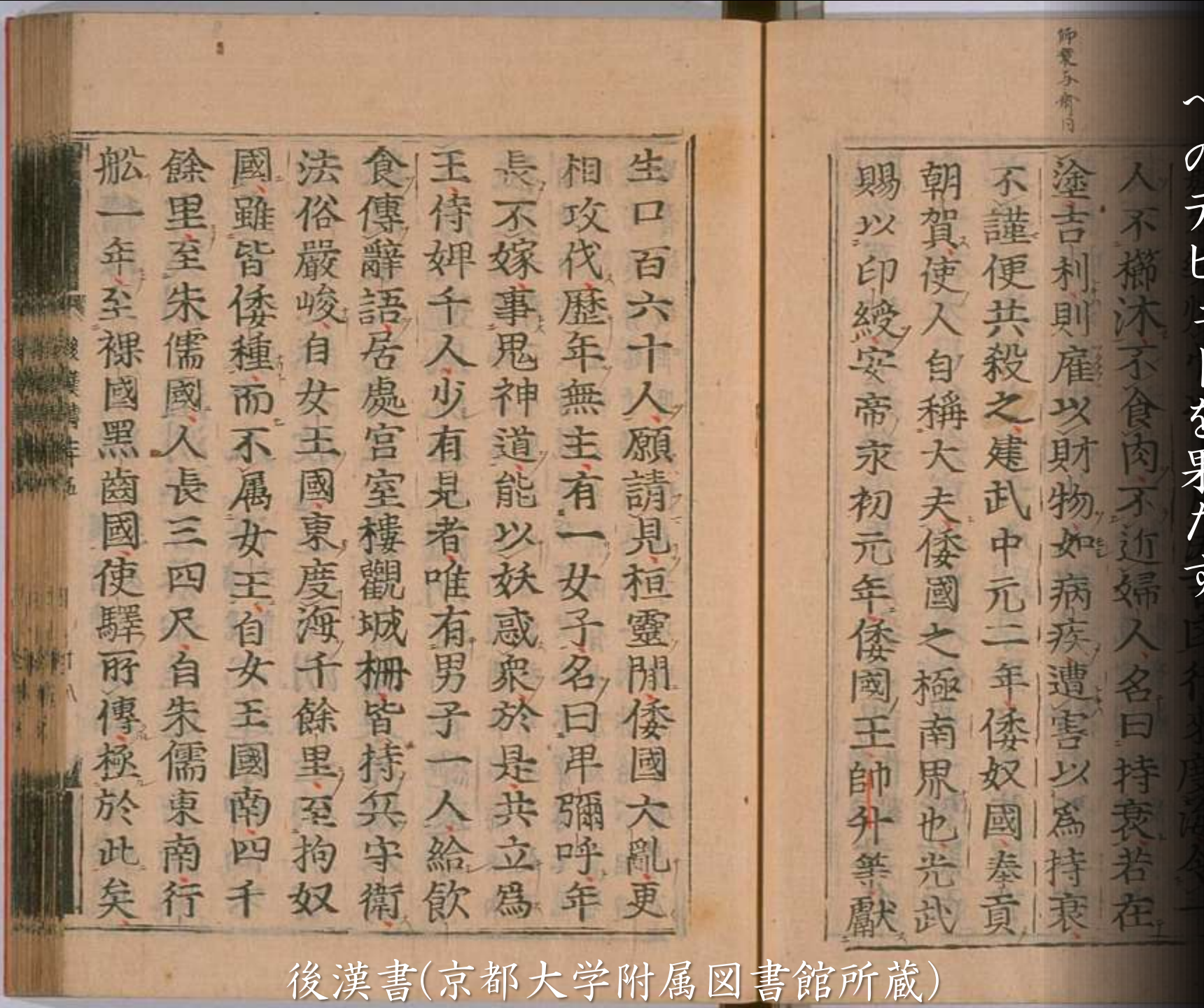
アジア各地から日本列島に渡り、縄文、弥生の文化を築いた人々は、遺伝的には多様な集団であったが、やがて日本語を共通言語とし、時間や空間を超えて知識を伝達・蓄積することで、独自の文化圏を形成していった。

第二節　中国と「倭」

アジアの国際社会へのデビュー

〔解説〕

日本列島に誕生した、日本語を共通言語とする集団は、アジアの人々から「倭」と呼ばれるようになった。「倭」は、西暦一世紀ごろから中国へ使節を派遣し、アジアの国際社会へのデビューを果たす。



人不櫛沐不食肉不近婦人名曰持衰若在
塗吉利則雇以財物如病疾遭害以爲持衰
不謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢
朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武
賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升等獻
生口百六十人願請見桓靈閒倭國大亂更
相攻伐歷年無主有一女子名曰卑彌呼年
長不嫁事鬼神道能以妖惑衆於是共立爲
王侍婢千人少有見者唯有男子一人給飲
食傳辭語居處宮室樓觀城柵皆持兵守衛
法俗嚴峻自女王國東度海千餘里至拘奴
國雖皆倭種而不屬女王自女王國南四千
餘里至朱儒國人長三四尺自朱儒東南行
船一年至裸國黑齒國使驛所傳極於此矣

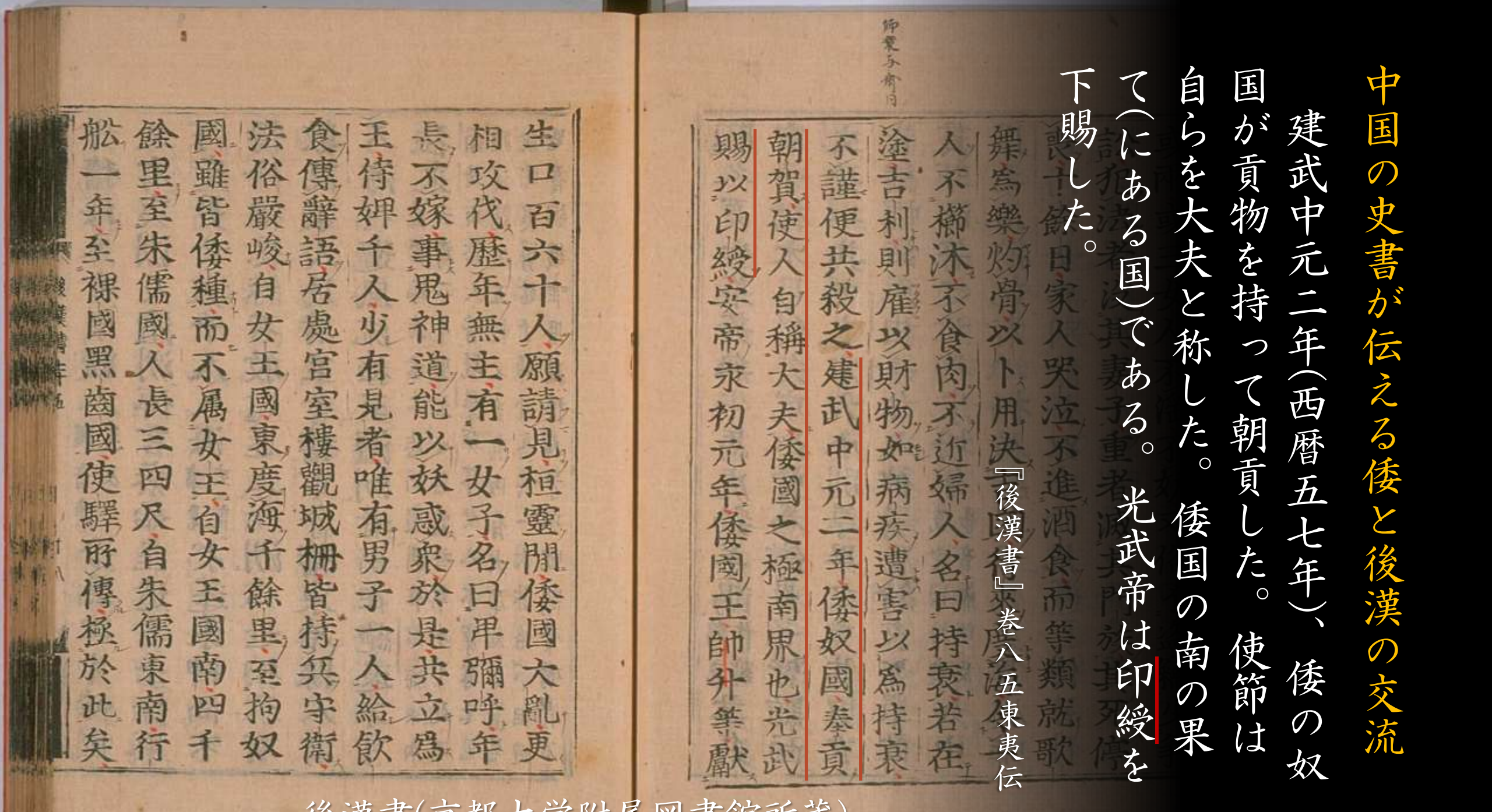
後漢書(京都大学附属図書館所蔵)

倭の奴国が後漢に朝見し、金印を下賜される(57年)

中国の史書が伝える倭と後漢の交流

建武中元二年(西暦五七年)、倭の奴国が貢物を持って朝貢した。使節は自らを大夫と称した。倭国の南の果て(にある国)である。光武帝は印綬を下賜した。

『後漢書』巻八五東夷伝



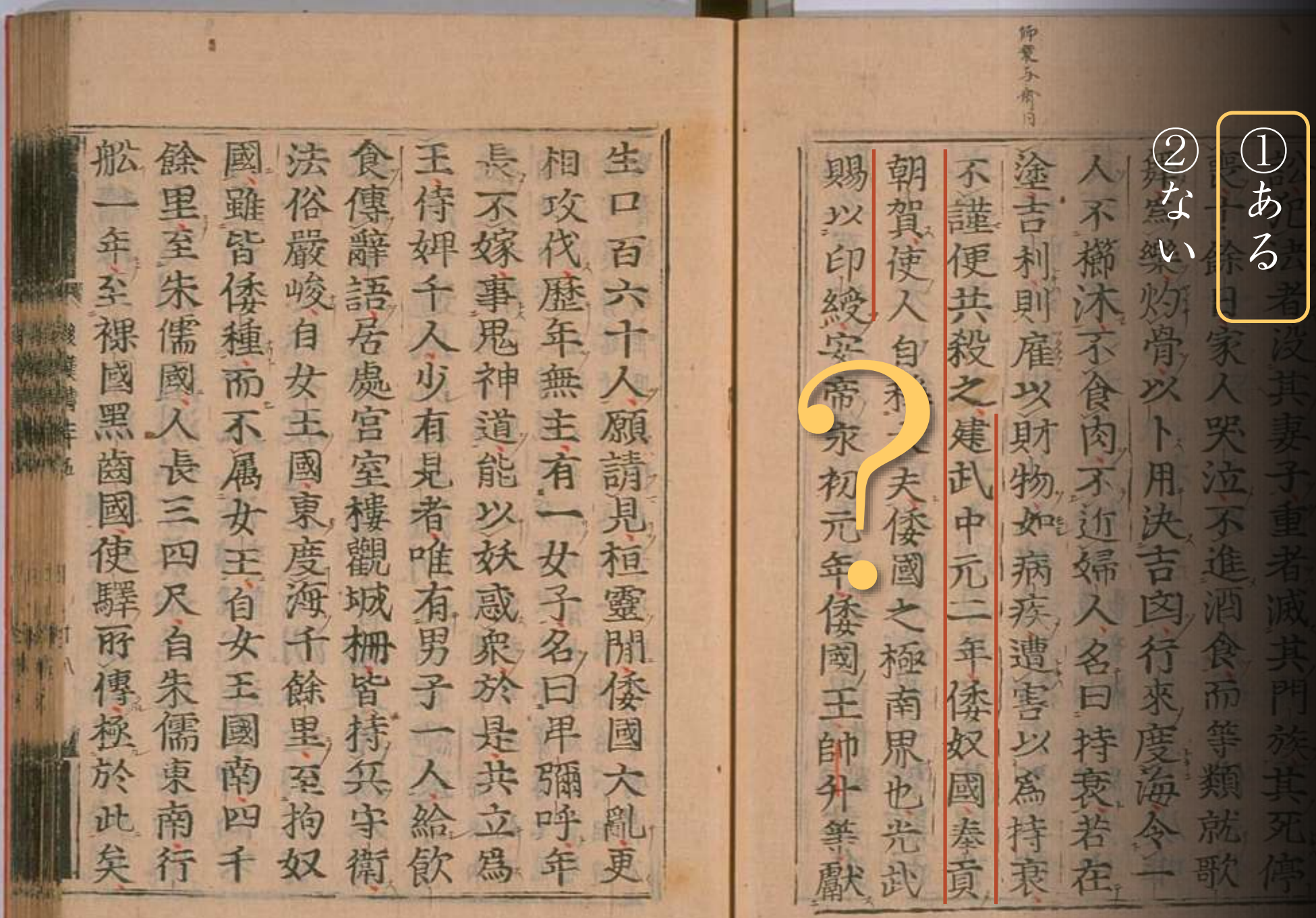
生口百六十人願請見桓靈閒倭國大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰卑彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑衆於是共立爲王侍婢千人少有見者唯有男子一人給飲食傳辭語居處宮室樓觀城柵皆持兵守衛法俗嚴峻自女王國東度海千餘里至拘奴國雖皆倭種而不屬女王自女王國南四千餘里至朱儒國人長三四尺自朱儒東南行船一年至裸國黑齒國使驛所傳極於此矣

後漢書(京都大学附属図書館所蔵)

後漢の光武帝が倭の使節に下賜したという印綬は、いまもあるでしょうか？

①ある

②ない



師震子齊曰

沒其妻子重者滅其門族其死停喪十餘日家人哭泣不進酒食而等類就歌舞樂灼骨以卜用決吉凶行來渡海令一人不櫛沐不食肉不近婦人名曰持衰若在塗吉利則雇以財物如病疾遭害以爲持衰不謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升等獻生口百六十人願請見桓靈閒倭國大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰卑彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑衆於是共立爲王侍婢千人少有見者唯有男子一人給飲食傳辭語居處宮室樓觀城柵皆持兵守衛法俗嚴峻自女王國東度海千餘里至拘奴國雖皆倭種而不屬女王自女王國南四千餘里至朱儒國人長三四尺自朱儒東南行船一年至裸國黑齒國使驛所傳極於此矣

後漢書(京都大学附属図書館所蔵)

江戸時代に発見された金印

〔解説〕

倭の奴国の使いが後漢の光武帝に金印を贈られてから一七〇〇年後の天明四年(一七八四年)、福岡県の志賀島(しかのしま)で、巨石の下から「漢委奴国王」の金印が発見された。

福岡県志賀島

あなたは、福岡県志賀島で発見された金印を本物だと思うか？
①本物だと思う
②贋物だと思う
?
1784年に福岡県志賀島で
発見された「漢委奴国王印」
（縦2.3cm×横2.3cm 重109g）

「金印『漢委奴國王』は、江戸時代の半ば過ぎ、十八世紀の終わりに偽造された。それが私の結論である」

三浦佑之（みうらすけゆき）『金印偽造事件』（幻冬舎新書 二〇〇六年）一〇頁

三浦佑之（千葉大学名誉教授 1946-）

中国でも新たに発見された金印

〔解説〕

一九八一年、中国江蘇省の漢墓の近くから「広陵王璽」と刻まれた金印が発見された。広陵王とは光武帝の子劉荊が明帝の永平元年（五八年）に授与された王位で、その際に下賜されたものと考えられている。

江蘇省邗江甘泉鎮

福岡県志賀島

日本の金印は、中国で新たに出土した同時期の金印と幅（二・三センチ＝漢代の一寸）、字体ともに酷似している。

1981年、江蘇省甘泉2号漢墓から出土した「広陵王璽」。永平元年(58年)に光武帝の子劉荊に下賜されたもの
（縦2.3cm×横2.3cm 重123g）

1784年、福岡県志賀島から出土した「漢委奴国王印」。建武中元2年(57年)、光武帝が倭の奴王に下賜したもの
（縦2.3cm×横2.3cm 重109g）

滇王之印(漢が帰順した滇国の王に与えた金印)からは、周辺国の王にも金印が下賜されていたことがわかる。

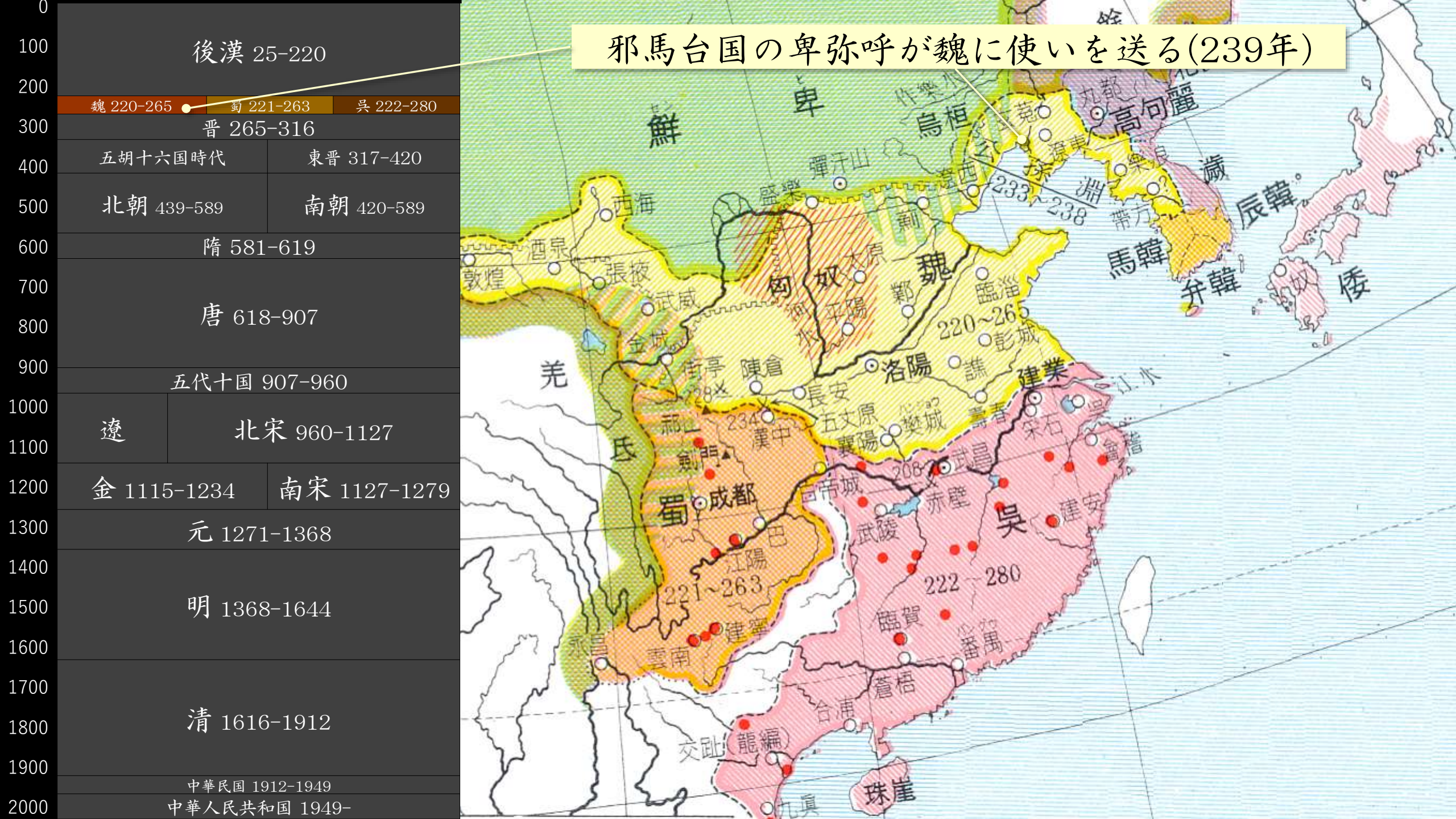
1956年、雲南省晋寧県の漢墓から出土した「滇王之印」。漢武帝が元封2（前109）年に滇王に下賜したもの（縦2.3cm×横2.3cm、重さ90g）

1784年、福岡県志賀島から出土した「漢委奴国王印」。建武中元2年(57年)、光武帝が倭の奴王に下賜したもの（縦2.3cm×横2.3cm 重109g）

倭の奴国に続いて東アジアの歴史の舞台に登場したのが、邪馬台国の卑弥呼である。では、卑弥呼の時代は中国の何時代に当たるか？

①三国時代（三世紀）
②唐代（七～十世紀）

邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る(239年)



倭の奴国が後漢に朝見し、金印を下賜される(57年)

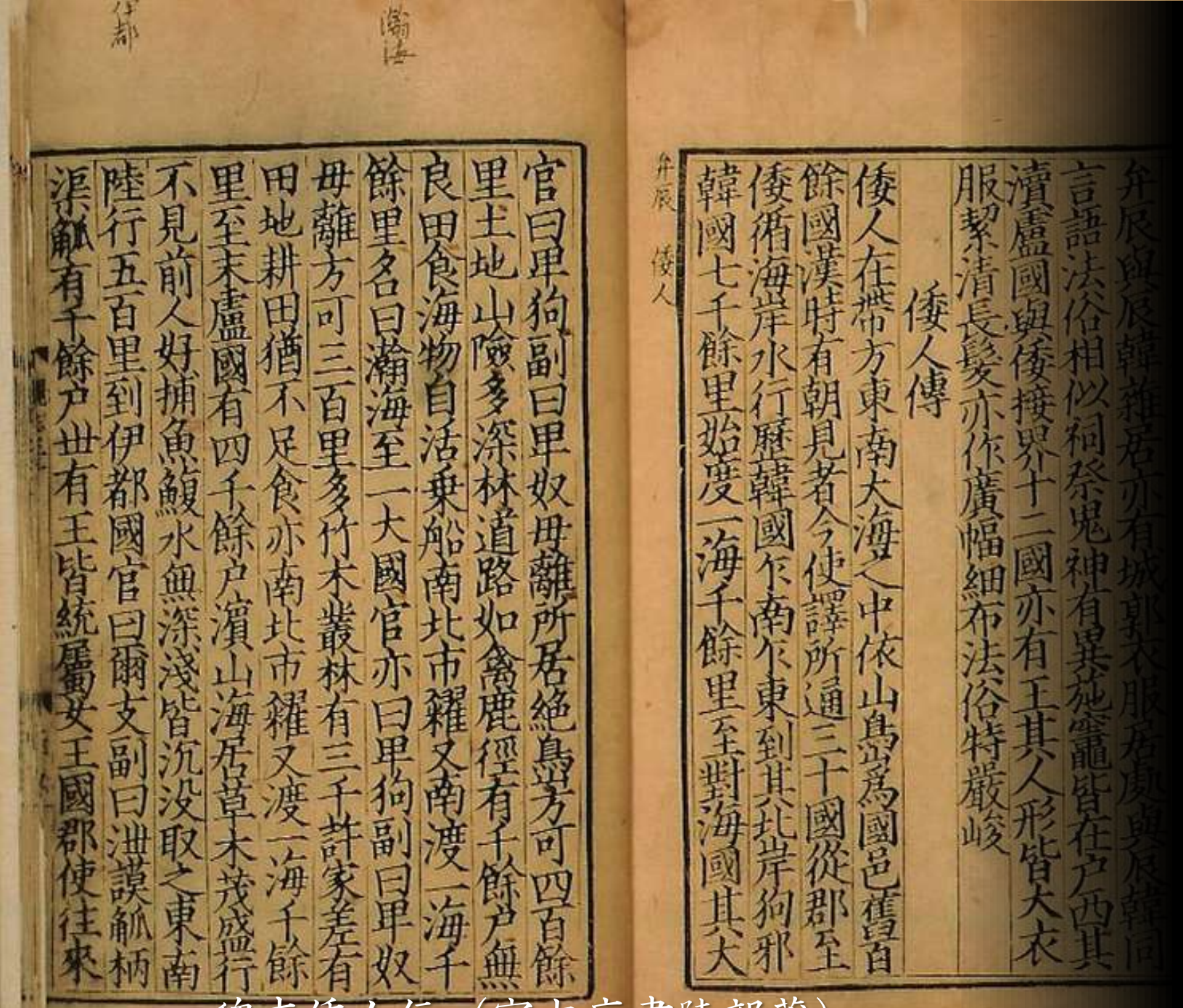
倭と魏の間で使節の往還が行われる(238～248)

魏志倭人伝

〔解説〕

西晋の陳寿が著した『三国志』の魏志の中の倭人に関する記録。

この書はもともと陳寿が私撰したもので、官撰の国史ではなかったが、陳寿の死後正史の一つに加えられた。



弁辰與辰韓雜居亦有城郭衣服居處與辰韓同
言語法俗相似祠祭鬼神有異施竈皆在戶西其
瀆盧國與倭接界十二國亦有王其人形皆大衣
服絜清長髮亦作廣幅細布法俗特嚴峻

倭人傳

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百
餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至
倭循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪
韓國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大
官曰卑狗副曰卑奴母離所居絶島方可四百餘
里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無
良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千
餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴
母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有
田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘
里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行
不見前人好捕魚鰒水無深淺皆沉没取之東南
陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨觚柄
渠觚有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來

魏志倭人伝（宮内庁書陵部蔵）

倭の女王卑弥呼

その国はもともと男子を王としていたが、七、八十年間、倭国が乱れ、戦乱が続いたため、ともに一人の女子を王に立てた。名を卑弥呼という。

卑弥呼は鬼道に事え、よく衆を惑わした。すでにかなりの年齢になっていたが夫はおらず、弟が国政を補佐していた。

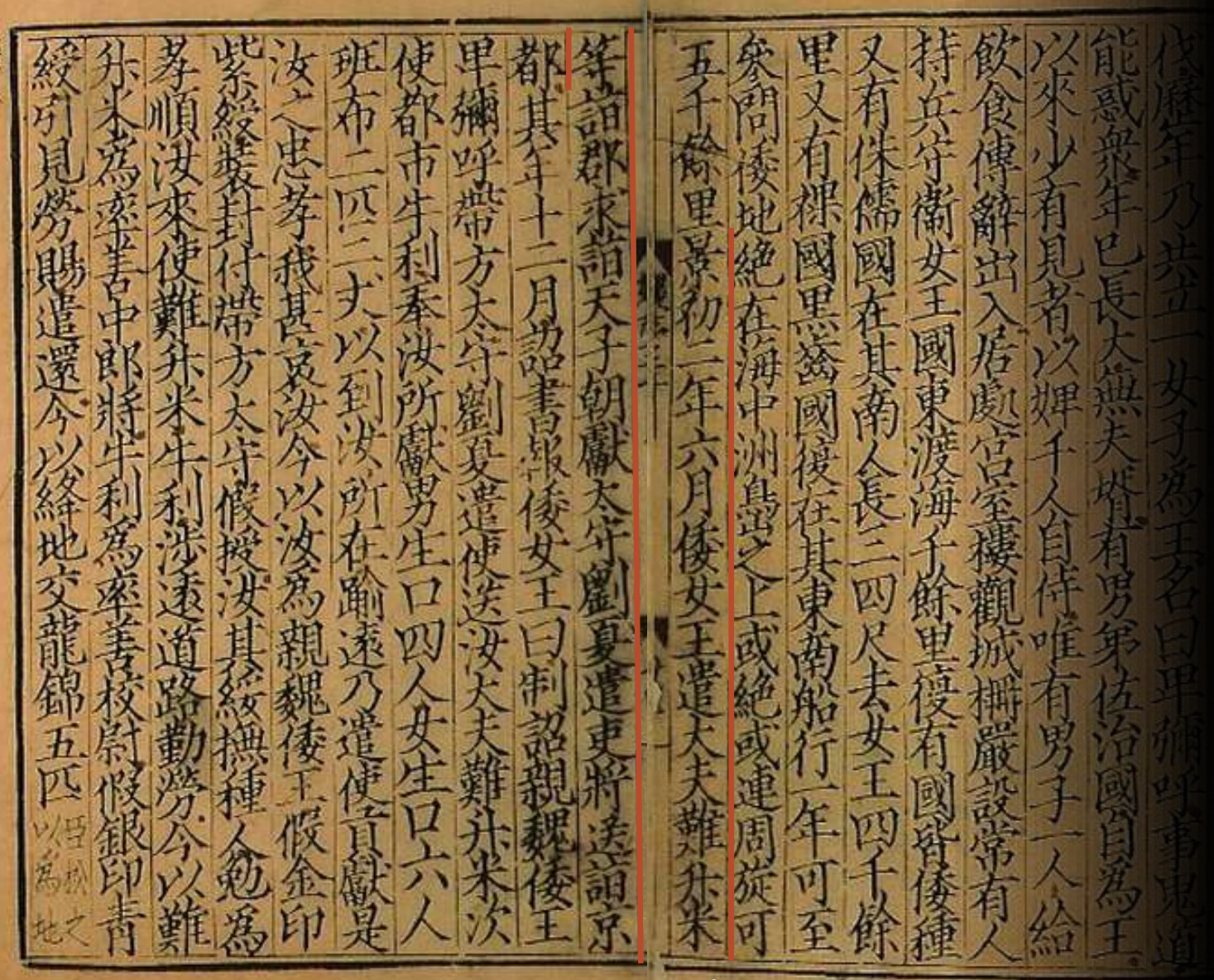
（西晋）陳寿『三国志』魏志倭人伝

魏志倭人伝（宮内庁書陵部蔵）

倭から魏への使節派遣

景初二年(二三八年)六月、倭の女王は大夫・難升米らを(帯方)郡に遣り、天子への朝見を求めた。(帯方郡)太守の劉夏は吏を遣り、(難升米らを)京都(洛陽)に送った。

(西晋)陳寿『三国志』魏志倭人伝



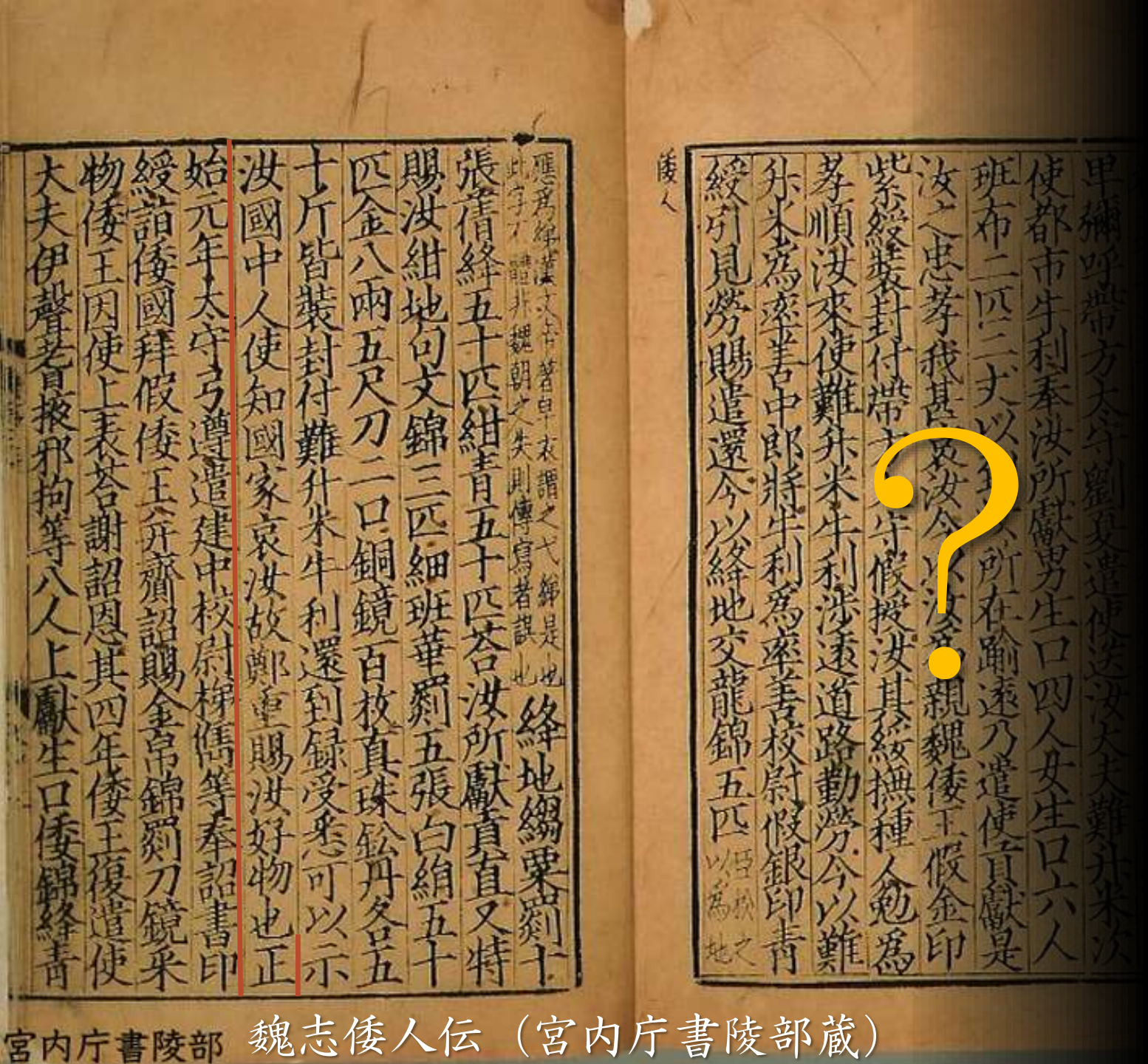
魏志倭人伝（宮内庁書陵部蔵）

魏志倭人伝は西暦二三八年(景初二年)に卑弥呼が使節を派遣したと記している。なぜこの年なのか？

①魏が蜀を滅ぼしたから

②魏との交流の障碍がなくなったから

西晋の陳寿が著した『三国志』魏志倭人伝には、当時の倭の社会や風俗が詳細に記録されている。なぜそのような情報が伝わったのか？



魏志倭人伝（宮内庁書陵部蔵）

魏の使節による倭の実状調査

〔解説〕

魏志倭人伝によれば、倭は景初二年(二三八年)に続き、正始四年(二四三年)と同八年(二四七年)にも使節を派遣している。

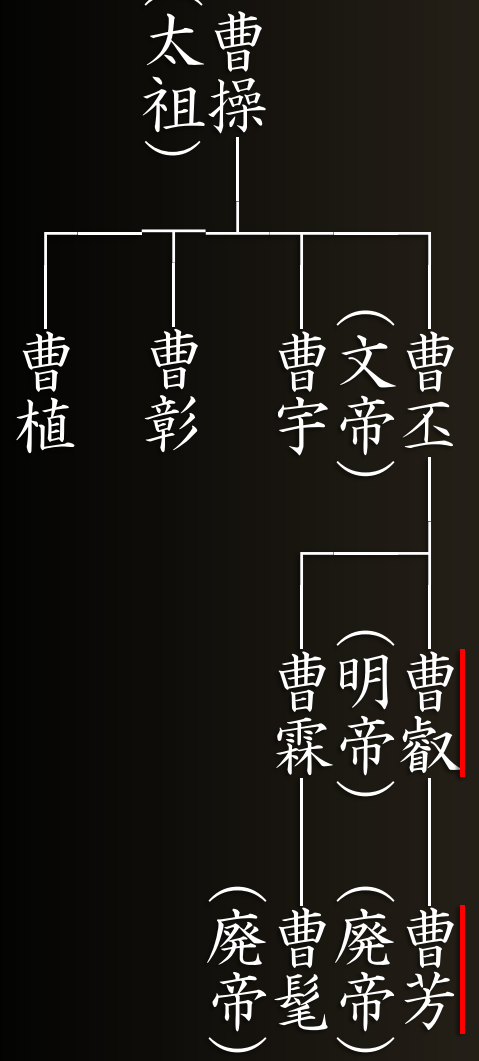
これに対し魏は、倭からの使節が来朝するたびに楽浪郡を通じて返礼の使節を派遣し、倭の実状を調査していた。

魏志倭人伝（宮内庁書陵部蔵）

宮内庁書陵部

島根県の神原（かんばら）神社古墳から出土した三角縁神獣鏡。裏面に魏の景初三年（二三九年）の銘のある。

【魏王朝系図】



「空白の四世紀」

〔解説〕

三国を統一した西晋は、やがて「八王の乱」と呼ばれる王朝内の内紛をきっかけに周辺の異民族の侵攻を招き、漢民族の支配層は長江の南に逃れて亡命政権を建てる。

四世紀、華北を支配した異民族によって交流の道を閉ざされた倭は、中国側の史料から姿を消した。

（宮内庁書陵部蔵）

倭王武の上表

〔解説〕

五世紀になると中国側の史料にふたたび「倭」が登場する。

南北朝時代の宋の歴史を記した史書『宋書』に、倭の国王が送った書簡が記録されている。雄略天皇に比定される倭王武が、宋の昇明二年(四七八年)に順帝に送った上表である。

遣使貢獻世祖大明六年詔曰倭王世子興奕世載忠作藩外海
稟化寧境恭修貢職新嗣邊業宜授爵號可安東將軍倭國王興
死弟武立自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七
國諸軍事安東大將軍倭國王順帝昇明二年遣使上表曰封國
偏遠作藩于外自昔祖禰躬擐甲冑跋涉山川不遑寧處東征毛
人五十五國西服衆夷六十六國渡平海北九十五國王道融泰
廓土遐畿累葉朝宗不愆于歲臣雖下愚忝胤先緒驅率所統歸
崇天極道逕百濟裝治船舫而句驪無道圖欲見吞掠抄邊隸虔
劉不已每致稽滯以失良風雖曰進路或通或不臣亡考濟實忿
寇讐壅塞天路控弦百萬義聲感激方欲大舉奄喪父兄使垂成
之功不獲一簣居在諒闇不動兵甲是以偃息未捷至今欲練甲
治兵申父兄之志義士虎賁文武効功白刃交前亦所不顧若以
帝德覆載摧此疆敵克靖方難無替前功竊自假開府儀同三司
其餘咸假授以勸忠節詔除武使持節都督倭新羅任那加羅秦
韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王
荆雍州蠻槃瓠之後也分建種落布在諸郡縣荆州置南蠻雍州
置寧蠻校尉以領之世祖初罷南蠻併大府而寧蠻如故蠻民順
附者一戸輸穀數斛其餘無雜調而宋民賦役嚴苦貧者不復堪
命多逃亡入蠻蠻無傜役彊者又不供官稅結黨連群動有數百
千人州郡力弱則起爲盜賊種類稍多戸口不可知也所在多深

宋書卷九十七倭国伝

倭の奴国が後漢に朝見し、金印を下賜される(57年)

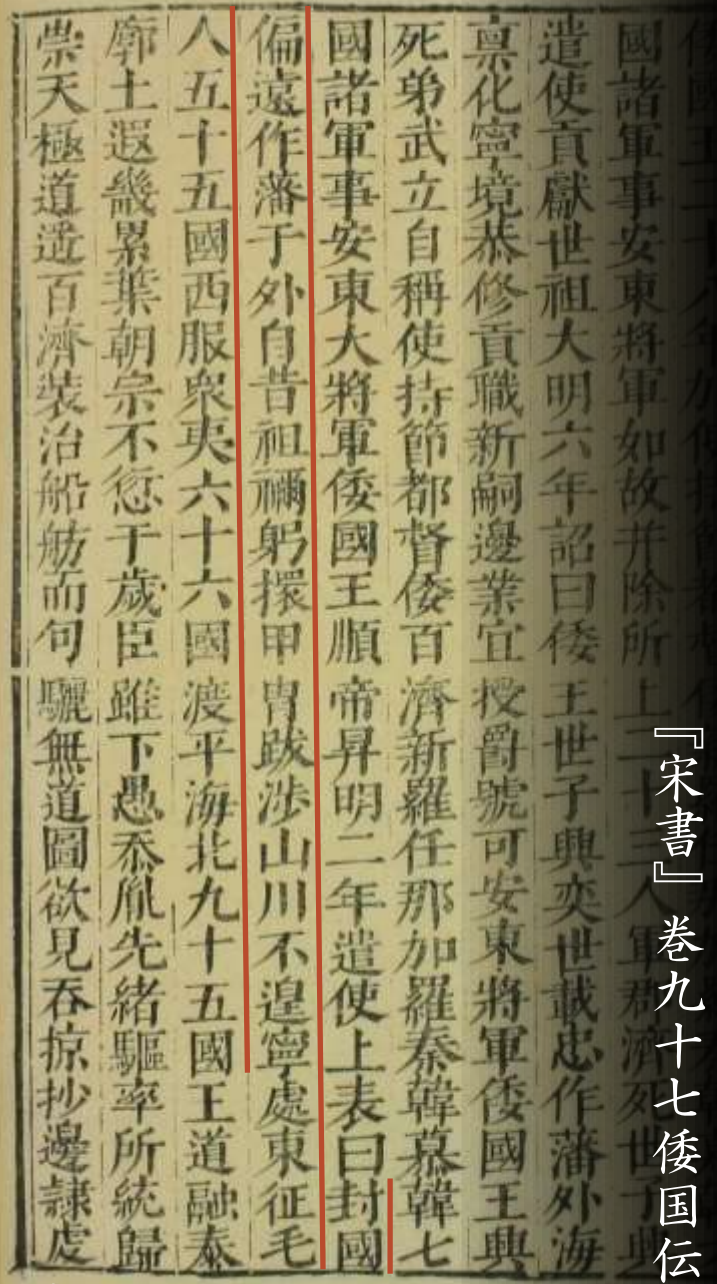
倭と魏の間で使節の往還が行われる(238～248)

倭の五王が東晋や南朝に進貢する(413～502)

倭王武の上表（四七八年）

「わが国は辺境に封じられ、外部の藩屏となっている。父祖の代より甲冑を纏って山川を渉り、休むことはなかった。東は毛人（蝦夷）五十五国、西は衆夷（熊襲、隼人など）六十六国、さらに海を渡って北（朝鮮半島）の九十五国を征服した。」

『宋書』巻九十七倭国伝



宋書巻九十七倭国伝

倭王武の上表によれば、五世紀末、倭は日本列島に広く勢力を拡大したという。近年、あるところで、これを裏付ける考古学的な発見があった。それはどこか？

①奈良県明日香村

②埼玉県行田市

？

国宝・金錯銘鉄剣

（きんさくめいてっけん）

〔解説〕

一九六八年、埼玉県行田市の稲荷山古墳から一一五字の銘文をもつ鉄剣が発見された（→地図）

銘文によれば、「辛亥年（四七一年）七月」に「獲加多支鹵（ワカタケル）大王」に仕えた「乎獲居（オワケ）」が作ったとあり、『日本書紀』に「幼武（ワカタケル）」と記された倭王武（雄略天皇）の勢力が、遥か東国にまで及んでいたことが明らかになった。

金錯銘鉄剣（埼玉県稲荷山古墳出土）

金錯銘鉄剣（埼玉県稲荷山古墳出土）

これは稲荷山古墳の金錯銘鉄剣と同じく五世紀末に作られた、七十五字の銘文をもつ鉄刀である。国宝に指定されたこの鉄刀は、どこで出土したものか？

①奈良県

②熊本県

?

NHK ETV特集「日本と朝鮮の２０００年・第２回 任那日本府の謎」より

銀象嵌銘大刀(熊本県江田船山古墳出土)

国宝・銀象嵌銘大刀

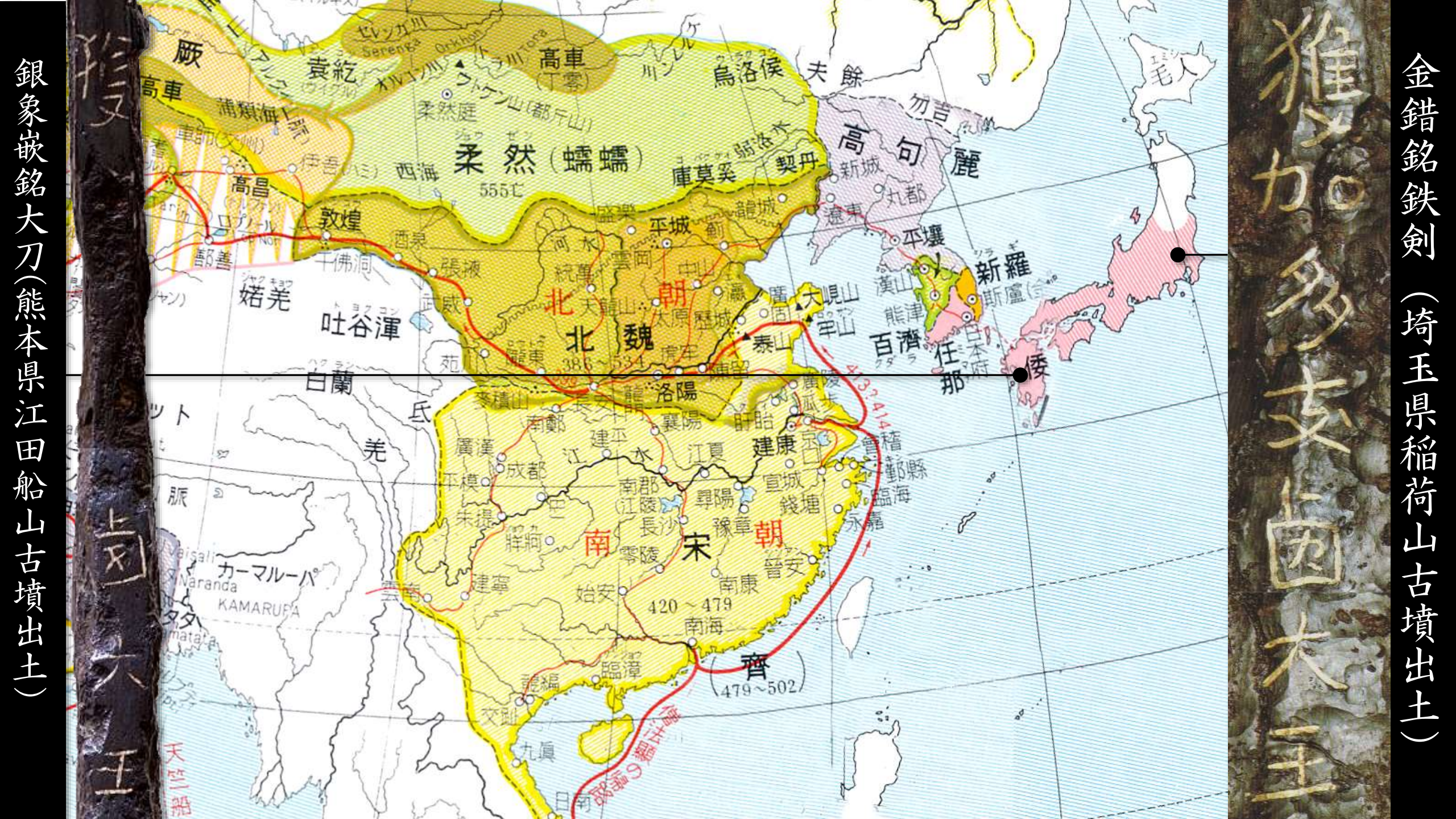
（ぎんぞうがんめいたち）

一八七三年（明治六年）、熊本県の江田船山古墳で出土した鉄刀。刀の脊に七十五字の銘文を持つ。

銘文の中に「獲□□□鹵大王」という大王の名が刻まれていることが知られていたが、稲荷山古墳の鉄剣の発見により、これが「獲加多支鹵大王」（ワカタケル大王）であることが明らかになった。

〔解説〕

「獲加多支鹵(ワカタケル)大王」の名を刻んだ剣や刀が、埼玉県と熊本県の古墳から出土したことにより、倭王武が南朝宋に送った上表の内容――五世紀後半に「倭」＝日本語文化圏が急速に拡大したこと――が事実であること明らかになった。


銀象嵌銘大刀（熊本県江田船山古墳出土）
金錯銘鉄剣（埼玉県稲荷山古墳出土）
獲加多支鹵大王
柔然（蠕蠕）
555亡
高車
袁紇
鳥洛侯
夫餘
高句麗
新羅
百濟
倭
任那
契丹
庫莫奚
敦煌
高昌
吐谷渾
姑臧
白蘭
氐
羌
カーマルーパ
KAMARUPA
北魏
386～534
平城
洛陽
建康
南朝
宋
420～479
南海
齊
479～502
成都
襄陽
寿春
廣陵
臨海
永嘉
會稽
平壤
漢山
熊津
日本府
毛人
勿吉
新城
丸都
遼東
龍城
張掖
酒泉
武威
長安
南鄭
江陵
長沙
零陵
始安
建寧
臨漳
交趾
九眞
日南
成都の錦江

銀象嵌銘大刀(熊本県江田船山古墳出土)

倭の拡大と渡来人

〔解説〕

熊本県江田船山古墳出土の銀象嵌銘大刀の銘文の末尾には、「書者張安也」と漢文(中国語)を書いた人物の名が刻まれている。

倭の勢力拡大と積極外交の裏には、この「張安」のような渡来人が、政権のブレインとして活躍していたことがわかる。

倭王武の時代(五～六世紀)の日本人はどのような姿をしていたのだろう。その姿を伝える資料が中国にある。それはどのような資料か？

① 外国からの使節を描いた絵巻

② 外国からの使節を詠んだ詩集

倭の奴国が後漢に朝見し、金印を下賜される(57年)

倭と魏の間で使節の往還が行われる(238～248)

倭の五王が東晋や南朝に進貢する(413～502)

南朝梁の蕭繹（後の元帝）が職貢図を描く(540年頃)

職貢図（六世紀、中国歴史博物館蔵）

〔解説〕

「職貢図」は、南朝梁の蕭繹（しょうえき、五〇五～五五四年、後の元帝）が朝貢に来た使節を描いた絵巻。もと二十五国が描かれていたが、現存するのは滑国、波斯国、百済国、亀茲国、倭国、狼牙修国、鄧至国、周古柯国、呵跋檀国、胡密丹国、白題国、末国の十二国。

肖像画の左には、各国の地理的な位置や風土、習俗、梁との関係などが記載されている。

南朝梁「職貢図」（北宋写本 中国歴史博物館蔵）

南朝梁「職貢図」に描かれた倭人像

〔解説〕

「職貢図」に描かれた倭の使節。当時、中国の人々の中で倭人がどのようにイメージされていたかがわかる。

ただし、絵に付された文を見ると、三世紀ごろの倭人の姿を記録した魏志倭人伝の記述と酷似している。このため、この図が六世紀ごろの倭人の姿を正しく反映しているのかについては議論がある。

南朝梁「職貢図」（北宋写本 中国歴史博物館蔵）

第三節　朝鮮半島と「倭」

明仁上皇の「ゆかり」発言

「日本と韓国との人々の間には、古くから深い交流があったことは、日本書紀などに詳しく記されています。韓国から移住した人々や招へいされた人々によって様々な文化や技術が伝えられました。宮内庁楽部の楽師の中には、当時の移住者の子孫で、代々楽師を務め、いまも折々に雅楽を演奏している人があります。

こうした文化や技術が日本の人々の熱意と韓国の人々の友好的態度によって日本にもたらされたことは幸いなことだったと思います。日本のその後の発展に大きく寄与したことと思っています。

サッカーワールドカップ日韓共同開催の前年に行われた天皇記念日の会見より

（二〇〇一年十二月二三日）

明仁上皇の「ゆかり」発言

私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると『続日本紀』に記されていることに韓国とのゆかりを感じています。

武寧王は日本との関係が深く、このとき日本に(儒教の)五経博士が代々日本に招聘されるようになりました。

また、武寧王の子、聖明王は、日本に仏教を伝えたことで知られております。

サッカーワールドカップ日韓共同開催の前年に行われた天皇記念日の会見より

(二〇〇一年十二月二三日)

天皇家に朝鮮半島の百済人の血が入っているとする上皇の「ゆかり発言」は、当時大きな話題となったが、五世紀ごろの武寧王の時代の百済人とはどのような人々だったのか？

南朝梁「職貢図」（北宋写本 中国歴史博物館蔵）

南朝梁「職貢図」（北宋写本 中国歴史博物館蔵）

『日本書紀』に記された百済武寧王

（雄略天皇五年（四六一年）夏四月、百済の加須利君（蓋鹵王）は……弟の軍君に言った。

「日本へ行き、天皇に仕えよ」

軍君は答えて言った。

「君主の命に背くことはできませんが、願わくは陛下の婦人を賜って後、遣いに参りたく存じます」

『日本書紀』巻十四雄略天皇五年

古活字本『日本書紀』（國學院大學図書館蔵）

『日本書紀』に記された百済武寧王

加須利君は、妊婦の婦人を軍君に嫁がせて言った。

「わが妊婦はまもなく臨月を迎える。途中で子供が生まれたら、船に乗せ、たとえどこにいようとも、すぐに国へ送り返すように」

こうして別れを告げると(日本の)朝廷へ遣いに向かった。

『日本書紀』巻十四雄略天皇五年

古活字本『日本書紀』(國學院大學図書館蔵)

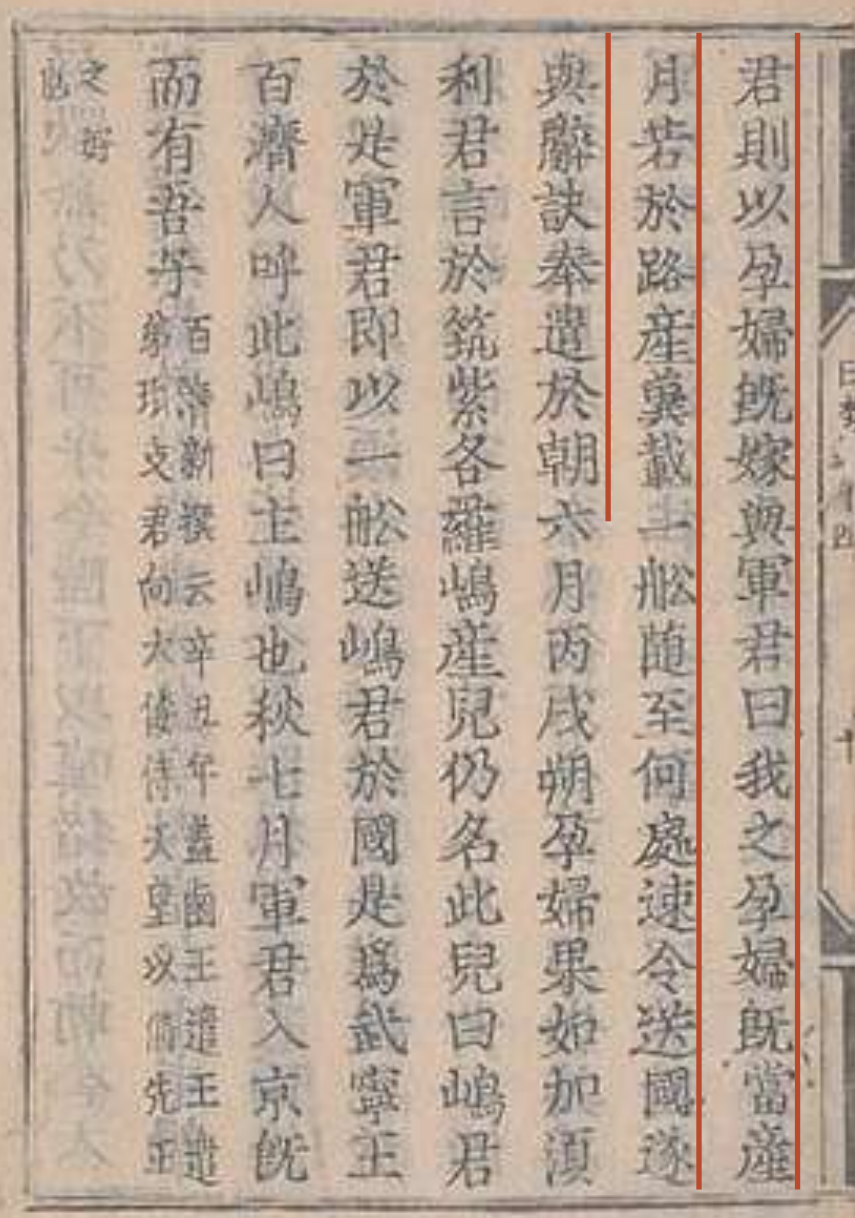
『日本書紀』に記された百済武寧王

六月丙戌の朔、妊婦は加須利君が言ったとおり、筑紫の各羅島(加唐島)で男児を生んだ。そこで、この児に「島君」という名をつけた。

軍君は一隻の船で島君を国へ送り返した。これが武寧王である。

百済の人々はこの島を「主島」と呼んだ。

『日本書紀』巻十四雄略天皇五年



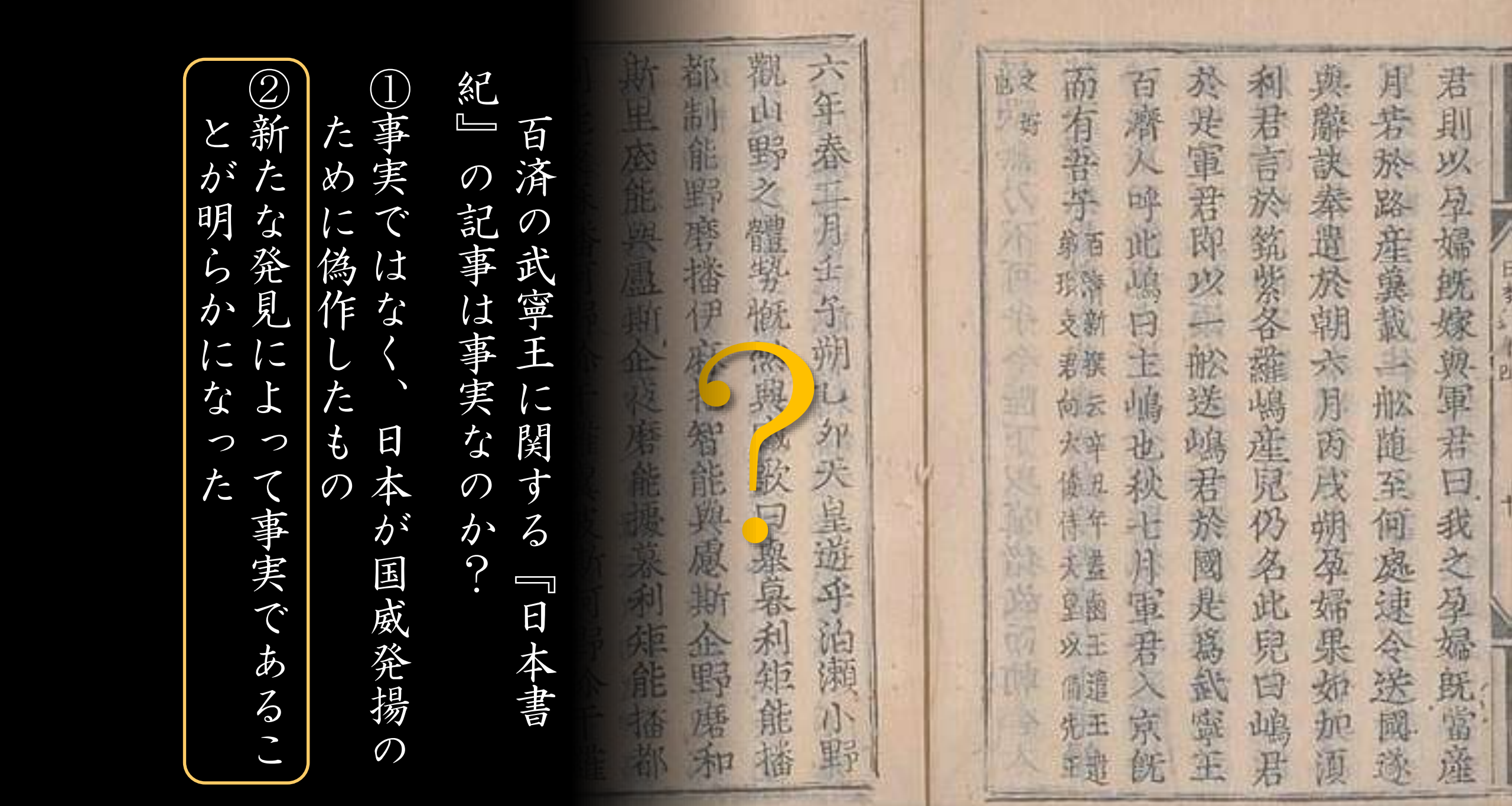
古活字本『日本書紀』(國學院大學図書館蔵)

加唐島

百済の武寧王に関する『日本書紀』の記事は事実なのか？

①事実ではなく、日本が国威発揚のために偽作したもの

②新たな発見によって事実であることが明らかになった



古活字本『日本書紀』（國學院大學図書館蔵）

新たに発見された武寧王の陵墓

〔解説〕

一九七一年、忠清南道公州市(熊津)の宋山里古墳群から新たな古墳が発見され、その中にあった墓誌から武寧王の陵墓であることが確認された。

武寧王陵の墓誌

陵墓から発見された墓誌には、「寧東大将軍百済斯麻王、年六十二歳、癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩」とあり、『日本書紀』が加唐島の「島」にちなんでつけたと伝える「斯麻(しま)」の名で呼ばれていたこと、没年が「癸卯年(五二三年)」であることが明らかになった。

武寧王墓誌(公州宋山里古墳群武寧王陵資料館蔵)

まとめ

現生人類は、その優れた言語能力によって高度な文明を築いた。アジア各地から日本列島に渡り、縄文、弥生の文化を築いた人々は、遺伝的には多様な集団であったが、やがて日本語を共通言語とし、時間や空間を超えて知識を伝達・蓄積することで、独自の文化圏を形成していった。

日本列島に誕生した日本語文化圏「倭」は、紀元後まもなく中国との交渉を開始し、さらに朝鮮半島との交流を通じて、儒教や仏教などの先進的な文明を取り入れていった。

近年、日本や中国、韓国での新たな考古学的発見によって、倭とアジア各地の交流がしだいに明らかになっている。

参考文献

・スヴァンテ ペーボ著・野中 香方子訳『ネアンデルタール人は私たちと交配した』（文藝春秋二〇一五年）

映像資料

・NHK「生命大躍進 第三集 ついに知性が生まれた」